

中国仏教における六道観の一考察

——死後の世界としての六道——

鈴木 あゆみ

本稿は『法苑珠林』を資料として中国仏教の特徴を明らかにする研究の一環である。中国仏教において靈魂は不滅とされる。この靈魂の存在と場所という観点から、中国仏教の六道観を考察したい。仏教において六道輪廻の主体は靈魂ではないが、中国において輪廻の觀念は靈魂に關連づけて捉えられ、死後も靈魂は生前の姿と意識を繼續し、自分自身が輪廻するように考えられたようである。

『法苑珠林』が六道観をどのように体系づけたかを明らかにし、その受容と変容について考察したい。

一 『俱舍論』の世界観

原始仏教において三界の構造についての解説はなく、三界の概念は心の内面の状態を示すものであり、場所として存在するものではなかった。しかし、三界の構造は部派の時代、『俱舍論』において体系化され、須弥山説に基づく概念上の世界となる。『俱舍論』における欲界は、天・人・畜生・餓

鬼・地獄の五道であり、天・地表・地下の三カ所に配当される。『俱舍論』の世界観は現在の六道観の基礎となる概念であり、業による輪廻の世界である。仏教の世界観の根底には業と輪廻の思想があり、地獄や天界を造り出すのは衆生の業の力である。衆生は自己の善惡の業により六道を輪廻する。^①

二 『法苑珠林』における六道観

六道編の各項目の初めに「仏教に帰依し、この苦に満ちた世界を離れ安樂に暮らすことを願う」という願文があり、六道のすべてが苦であることをいう。諸天部の最初には六道全体^②の解説があり、輪廻の原因が業であることを明示する^③。苦について、諸天部は末期の苦と来世の苦を、人道部は無常と不浄を強調し、阿修羅部は戦闘の悲惨さをいうなど、すべて苦悩に満ちた世界として書かれる。

六道の所在は『俱舍論』と同じ天・地表・地下であり、瞻部洲や鉄围山など、須弥山説に基づいた説明で位置が示され

る。天は天上、人は四大洲などの地表、阿修羅は「海穴に住⁽⁴⁾み」海を領土とする。鬼神は「この閻浮提の下五百由旬」や「かの鉄圀山の中間に住⁽⁵⁾む」とし、特殊な例として天上に存在する。餓鬼は人間の世界にも現れ、畜生は「本、所住の處大海の中に在⁽⁶⁾り」「正住とは鉄圀両山の閻冥閻の内に在⁽⁷⁾り」として海中や鉄圀山の間に住むが「流転して諸趣に遍在⁽⁸⁾す」とあり、全ての世界に存在する。地獄はすべて地獄という場所の説明であり、地下に存在する。六道の各世界は単純に上下に並ばず、人から畜生までの世界は重なり合つて存在している。

それぞれの業因は身語意の業・十業としてほぼ共通し、天から畜生までは、悪業だけでなく、善業の報いも受ける。待遇の差や外見の違いは皆、善悪の業の違いにより説明される。『法苑珠林』における六道は業による輪廻の世界であり、須弥山説に基づいた場所として存在する世界である。皆、自己の善悪の業により六道のそれぞれの境遇にあり、他者による救済については書かれていない。

三 業から靈魂へと変化する中国の六道観

『法苑珠林』の各項末尾の「感應緣」に引用される文学的資料に見られる六道観は以上の六道観とは異なる理解がなされている。

諸天部の「史世光」では「飛びて天に昇⁽⁹⁾る」など天に昇る姿が目撃され、天は人間の世界の上方に広がる天空に存在する。また、「世光が靈上に在りて衣を著すこと具に平生の如くなるを見る（中略）語りて曰く我は本、龍の中に墮すべきを支和尚我が為に經を転ずるに曇護・曇堅我を迎えて第七梵天快樂処に上すなり」として死者が天界に生まれたことを報告しており、天界は死後の世界である。畜生も同様に死後の世界として設定され、自分の業では畜生に生まれるはずが、追善供養の功德で天に生まれたという。死者が天界から里帰りする目的は「阿母を娛樂せしめんとす」とあり、生前の親子の關係が継続し、死後輪廻した先でも生前と同じ姿、同じ人間關係が継続している。

人道部では、実在した人物や実在の国を挙げ、「天竺国の人、皆長一丈八尺⁽¹⁰⁾」など具体的な数で人の身長や衣食を解説し、すべて現世に実在する世界である。死後の世界として捉えれば、鬼神部の「宋の司馬文宣」に「平生の時十善を修す。若し經に言う如くならば応に天に生ずることを得るべし。若しは人道に在るべし。」と言っており、人も死後に生まれる世界の一つであり、天に次ぐ理想の世界とされる。

阿修羅部では、阿修羅はすべて西域に実在するものとして書かれ、死後の世界と捉える記述はなく、阿修羅は西域の岩屋に住む妖怪、弥勒の到来を待つ仏道修行者のように書かれ

ている。

鬼神部では「宋の司馬文宣」に「弟、喪す。（中略）身、霊座の上に形れ、平日に異ならず。廻遑歎嗟して飲食を求む。」⁽¹⁴⁾とあり、餓鬼が人間の世界を食を求めてさまよっており、餓鬼は現世の内に人と共に存在している。

畜生部では動物が人間の女を攫い子供を生ませ、その子供が子孫を残し辺境の民族の起源となるという話が挙げられ、現世の實在の場所で實在の民族の起源をいい、畜生の世界を現世に實在の場所とする。他の資料で補うと『太平廣記』の「竹永通」に、「竹永通は借りたものを返さない。死後、ものを借りた家の牛に生まれ、その証拠に牛の足には竹永通とある。遺族は借りたものを返済し、牛を買い取る。そして現在牛となっている故人のために追善の供養を行うと牛は死ぬ⁽¹⁵⁾。」という話があり、畜生も死後の在り方であり、悪業の報いで畜生に生まれる。その救済は追善供養であり、供養により畜生という悪処から天や人などの樂処に生まれ変わったため牛は死んだと考えられる。

地獄については鬼神部の「宋の李旦」に「暴に死す。心の下冷ならず。七日にして蘇る。（中略）乃ち是れ地獄の中なり。（中略）或いは罪囚有り。語を寄せて家に報ず。道く『生ける時、罪を犯す。為に福を為さしめよ。』」⁽¹⁶⁾とあり、李旦が急病で死に、生き返る。この間に地獄を見るが、亡者から遭

族に「自分は生前に悪事を働いたから、地獄に堕ちて苦しんでいる。追善の供養を行い、自分を救ってほしい。」という伝言を頼まれる。死んでいる間に見聞きした地獄の様子を語る。地獄は死なないと行くことができない死後の世界である。地獄の亡者は人の姿をしており、追善の供養を求める。地獄部の「晋の居士張泰」では、張泰が地獄巡りの途中、地獄から解放される人を見る。「其の家、其れが為に寺塔の中に懸幡・焼香し、其の罪を救済す。福舎に出すべし。」⁽¹⁷⁾とあり、追善供養による救済と供養の重要性をいう。また、張泰は「祖父母及び二弟の此の獄中に在るを見て相見て涕泣⁽¹⁸⁾」するなど、地獄の亡者も生前の姿を継続しており、血縁関係も継続している。

仏教の六道は須弥山説に基づいた世界であり、業による輪廻をいう。自因自果と三世にわたる業報が原則だが、これらの話では、悪処に生まれる時は自分の業によるが、そこから抜け出す時は他人の業による。他者による追善供養の功德により、より良い場所に生まれ、自己の業よりも追善供養の功德による救済に重点が置かれる。六道は迷いの世界であり、そこから解脱することが望ましい在り方である。しかし、天は福樂極まりない理想の世界に変容し、再び人に生まれることも望ましいこととされている。

各世界はすべて現世に實在する場所に設定され、ここでは

須弥山も瞻部州も存在しない。六道に存在するものも、主に人間か動物の姿であり、現世に実在する身近なものとなつてゐる。

六道の各世界は断絶しておらず、死者は輪廻した先の世界から頻繁に人間の世界に現れ、人間の側からも他の世界を見聞することができる。死者は生前と同じ姿で現れており、靈魂のみならず、生前の体も継続している。また、親子や兄弟など、生前の關係も引き継がれる。中国人の理解では、輪廻した後も生前の人格を失わず、体を伴つて自分自身が輪廻するように考えられていた。

中国においても業による輪廻の觀念は存在し、仏教の業論をそれなりに受容している。しかし、中国において六道は現世に実在する場所となり業の問題としてよりも、死後の世界として捉えられている。

四 結論

以上のように中国において仏教の六道観は、仏教受容以前から存在する伝統的觀念に基づいて理解されている。『俱舍論』の宇宙観では、宇宙は業により形成、破壊され、衆生は業により輪廻する。中国の伝統的宇宙観では、宇宙は氣によつて形成され、人間や靈魂も氣で構成される。また、人は死ぬと鬼となり、鬼は氣であると説明される。鬼は魂氣と魄

氣の二種類にわかれ、魂は天に、魄は土に帰る¹⁹⁾。しかし、氣であると説明される靈魂は姿形を持つようになり、生前の人格もそのまま受け継ぐ。人々は死後の世界を現世の延長のよう²⁰⁾に考え、生者も死者も互いの世界を頻繁に行き来し、冥界は身近なものと考えられた。

中国仏教における六道観は、須弥山説に基づいたインドの宇宙論から、中国の伝統的来世観の中で、靈魂觀や冥界觀として捉えられ、靈魂が輪廻して死後の世界を形成している。

- 1 定方晟『須弥山と極楽』講談社現代新書三三〇、二〇〇一
(一九七三)、一一九—一二三 2 『大正蔵』五三、三〇一b/
三〇五b/三〇八b/三一a/三二七a/三二二b 3
同、三〇一b 4 同、三〇八c/三〇九a 5 同、三一b
6 同、三一七c 9 同、三〇三c 12 同、三〇
七b/三〇八a 13 同、三一四b 15 『太平広記』一三
四、応報三三 16 『大正蔵』五三、三一五a 17 同、三
三〇c 19 『礼記』祭法・郊特性、『淮南子』主術篇 20 伊藤
清司『死者の棲む樂園』角川書店、一九九八。田中純男編『死後
の世界』東洋書林、二〇〇〇。合山究『雲烟の国』東方書店、一
九九三。など。

〈キーワード〉『法苑珠林』、靈魂、六道

(愛知学院大学院)

I appreciate that Huiyuan, as a Mahāyāna Buddhist, valued the Sarvāstivādin doctrine.

105. Title: Rebirth in the Six Realms in the *Fayuan zhulin*

Ayumi SUZUKI

This study, focused on the *Fayuan zhulin*, is a part of a study to clarify the characteristics of Chinese Buddhism. In it I clarify how the *Fayuan zhulin* systematized the presentation of the idea of rebirth in the six realms. Then I consider how the rebirth theory was received and transformed in China.

The six realms idea was originally a generalized world-system based on the Sumeru model and was part of a karma-driven cycle. But in China, the six realms were regarded as a problem of soul rather than a problem of karma. The subject of saṃsāra changed from karma to a soul and a soul possesses the same figure and consciousness as individuals possess during their lifetime. Therefore the six realms are not isolated from this world, and a transmigrating soul continues having a relation with living beings.

The outlook on the six realms idea in Chinese Buddhism shows us the transformation from Indian cosmology into the Chinese view that a soul transmigrates and forms the world after death.

106. Bodhisattva Practice in the Upāya-kaśālya Chapter of the Lotus Sūtra

Takashi HAYAKAWA

I Introduction

The Lotus sūtra Chapter II (Upāya-kaśālya) is a very famous chapter in the history of the Lotus sūtra. I would like to examine the Bodhisattvas in Lotus sūtra and their ascetic practices mentioned in Chapter II undertaken on the way to becoming Buddha.

II Bodhisattva of the Lotus sūtra

The relationship between the bodhisattva of the Lotus sūtra and the śrāva-